

最近のアメリカ農業事情

大 和 田 啓 氣

本稿は、去る五、六月にかけてカナダに於いて開かれた國際農業生産者連盟第三回年次大會に出席され、更に續いて四カ月間アメリカ各地の農業事情を視察して歸られた本所兼務の農林省農地局大和田事務官の、十一月二十二日本所の臨時研究會に於ける報告を速記したものである。(編者)

旅行のあらまし

私は五月二十五日に日本を發ちまして、五月末から六月一日までカナダのオンタリオ州ゲルフに開かれた國際農業生産者連盟 (The International Federation of Agricultural Producers) 第三回年次大會に出席しました。それが終つてからキヤナダとアメリカの農業を見たのでありますが、最初の三週間ほどは會議に出席した二十三カ國、百人ほどの人數で旅行しました。六月十一日にゲルフを立ち六月二十一日ヴァンクーバーからアメリカのワシントン州に入りました。この間オンタリオ州からブリチシュ・コロンビヤまでカナダの主要な農業地帯を通つたのであります。この旅行はキヤナダとアメリカの大きな農業團體 A Canadian Federation of Agriculture と American Farm Bureau Federation の世話で寢臺車を用意してくれましたので、夜汽車で眠り朝から各地の農業を見るといふ具合

でした。それでカナダの五州を見、アメリカではワシントン州からオレゴン、カリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、カンサス、アイオワ、イリノイ、ウエストヴァージニア、ヴァージニア、ペンシルバニア、ニューヨーク、ニューヨークの各州をまわり、七月二日ニューヨーク市について旅行を終りました。この旅程は、おそらく八千マイル乃至一萬マイルに及ぶ大旅行でありました。

七月二日一行と別れたのですが、私は農地改革に關係した者として、これからの日本農業の在り方についていろいろのなやみを持つていました。それ故できるだけアメリカの農業をみ、日本農業に對してなにか飛躍のチャンスをつかみたい氣持ちがつかつたものですから、できるだけ長くアメリカにとどまるよう努力しました。

最初の旅行でアメリカの農業を大觀できたわけですが、この旅行で見ることができなかつた地帯が二つあります。その一つは、テキサスを中心にしてルイジアナ、アルカンサス、ミシシッピ等の南部地帯であります。もう一つは、ヴィスコンシン及びミネソタの地帯であります。

七月二日に一行と別れてからワシントン市に二週間ほど滞在し、農務省及び議會の連中の話をきいてから一人で南部に向けて發ちました。テネシイ、ルイジアナ、アルカンサス、テキサスが主であります。私が南部に旅行したのはTVAを見ることがと南部の綿作、稻作を見ることがあります。また南部にはニグロの差別待遇の問題があり、また極く小部分ではありますが、小規模な小作農が刈分け小作をやつてゐる點も私の興味をひく問題でありました。この旅行にはほぼ一カ月かかりました。豫期したよりも遠いところに行き、メキシコとテキサスの境界にあるリオグランダ谷まで見ました。この川は、コロラドからニューメキシコを通り國境を流れて海に注ぐのであります。歸りはジョージアの煙草地帯を通つて、再びワシントン市に歸つてきたわけであります。それからまた三週間ほどは、生絲の市場を

勉強にニューヨークに参つたりなどいたしましたが大體ワシントン市に滞在しました。

次にヴァイスコンシン、ミネソタを中心に見ようと思ひ、ワシントンを九月初旬にたちました。途中シカゴに少し寄りました。シカゴでは鐵鋼のストをやるかやらないかというクリティカルなときでありましたが、CIOの連中と話をして實に愉快でした。そのときアメリカで第七番目という鐵鋼會社の工場を見ましたが、これについては省略します。その後イリノイの農村を見、ヴァイスコンシン、ミネソタを二週間旅行しました。それからネブラスカ、コロラド、ニューメキシコ、カリフォルニアをみました。最後のカリフォルニアで二週間ほど餘裕がありましたので、もう一度カリフォルニア全體を廻りました。これがわたしの旅行の概要であります。ちようどアメリカに四カ月いました。農業地帯としては、カナダとの境にあるノースダコタ、サウスダコタの地帯と、ポストンから北の大西洋岸の農業をみる事ができませんでした。しかし駆け足でしたがアメリカの農業地帯のだいたい全部を見ることができたといえると思います。

ゲルフ會議の中心問題

アメリカの農業の何を申し上げていいか問題が多いのですが、先ず私のお話の前提として、私が出席したキャナダの國際會議のあらましを御報告しあげます。この十一月二十一日からニューヨーク市のレイクサクセスでのFAO會議が開かれています。が、わたくしが出たのはそういうふうなわけば政府機關ではなく民間團體のあつまりで、加入者は各國の農業協同組合の連合會であります。これはイギリスの農協連合會主唱で第二次世界大戰直後一九四六年の初頭にロンドンで創立されました。世界農業の生産力が第二次世界大戰を通じてアメリカとカナダに於いていちじる

しく發展したこと、並に戦時中は減退したヨーロッパの農業生産力もマーシャルプランによつてやがて恢復するであらう、したがつて食糧不足の問題はやがて食糧過剰の問題となり、會て一九二九年にアメリカを起點として世界をゆすぶつたあの農業恐慌に各國がまきこまれるおそれがある、それ故これを避けるためには勿論F.A.Oも對策をたてるであらうが政府にまかしきりにしておくわけにはいかない、一つ農民としても考えよう、こういう考え方にしたがつて組織された團體であります。第一回の會議は一九四七年にヘーグに於いて開かれ、第二回がパリ、第三回がカナダのオンタリオ州にあるゲルフという小さな大學町に今年開かれたのであります。

この會議に出席のために日本を去る以前、私はいろいろ海外の文献をみまして、だんだん食糧が餘りつつあることを感じていました。日本はいま食糧不足であるが、海外の事情によつて日本の食糧も一八〇度急轉することになるかもしれない、えらいことになるのではないかと豫想はしていました。しかしなんといつても自分自身が食糧不足の條件下に居りますと、世界の農産物の過剰がそれほどひどいものとはなかなか考えられません。ところがこの會議で各國の代表からそれぞれの農業事情、農産物の價格維持政策についての説明をきき、各國の人々の農業恐慌にたいする不安の氣分にふれて、それがなまやさしいものでないことにびつくりしたのであります。

この會議では農業協同組合の問題とか耕地の交換分合の問題とか、またマーシャルプランによるヨーロッパの復興問題等廣範圍に討議されましたが、しかし何といつてもいちばんの主題は農業恐慌を抑える方法を考えるということにありました。各國から農業事情の説明があつてから、政策委員會等四つの委員會が開かれました。政策委員會は農産物價格安定小委員會等いくつかの小委員會に分れましたが、この安定小委員會に、いちばん各國の精銳があつまつて實に眞剣な議論が行われました。

この大會の決議事項は農産物過剩対策について三つありました。その一つは、國際小麥協定の問題です。この協定は各國の要請によつて一九四九年三月四十八カ國の署名によつて成立しましたが、まだカナダ以外はどこも批准しておらず、このままでは流産する危険がありました。それでその批准を各國政府に要請することが第一の目的でした。この大會の影響もあつたと思いますが、國際小麥協定が各國の批准によつてその後まもなく效力を發生したことは御承知の通りであります。この協定が會議で問題になつたとき私はあるアメリカ代表に對し、なぜ去年協定に對して上院の批准がえられなかつたのかと質問したところ、やはりアメリカの内部に農産物の價格を安定させては充分の利益がえられないというグループがあるということです。價格にフラクチュエーションがあつてこそ金がもうかるという連中です。農民全體としては協定の成立を望んでいますが、一部の者のためにつぶれてしまつたといふのです。しかし今年の上院は必らず通るといふ見込みでした。アメリカには農業團體が三つありまして内政についての意見は一致しないのですが、この協定については足なみが完全にそろつていました。

第二の問題は小麥以外の農産物についての國際協定の問題であります。農産物過剩の危険があるのは必ずしも小麥だけにかぎらない。棉、砂糖、米などにも危険がせまつています。だから小麥ばかりでなくこれらの各品目についても同様の國際協定をむすぼうということです。この點についてはまだはつきりした動きはありませんが、アメリカの考え方としては品目別の協定の必要をだんだんに感じてきているといえましょう。

第三の問題はすでにあまつている農産物の處理の問題です。國際小麥協定にしろ今後の棉花協定にしろ長期的な政策であつて、現在餘つてゐるものについては甚だ無力です。それでこの際何等かの國際的な農産物取引機關をつくつて、餘つてゐる國から買つてアジア地域などの足りない國に賣る、しかし買手となるインド、支那、日本等には金が

なく、この取引機關で買上げた値段ではひきとることができないだろうから、その間に生ずる損失は各國で負擔して埋めよう、そういう構想です。この問題はその後實際に具體化し、私がアメリカを去るときにはこんどのFAO大會には正式の議題として提案され、國際的な機關が組織されるのではないかという情勢になつていました。日本にかえつて新聞をみて、國際商品取引所(International Commodity Clearing-house)の記事をみましたが、これがゲルフの大會の所産であります。

以上の事情でもわかりますように、日本が今年度において七十二萬トンの食糧を餘計に入れることになつた状態は、ゲルフ大會でもすでに豫想せられたことでした。そしておそらく來年、さ來年あるいはその後になるかもしれないが、各國の餘剩食糧が日本をめぐって放出されることが充分考えられます。そうすると日本の食糧問題が不足から過剩へと急轉回することになるでしょう。この新しい状態判斷を誤ると大變なことになるといふのが、私の會議に出席してえた結論であります。

アメリカの農業地帯別概観

これからアメリカ農業についてのお話をいたしますが、私が見聞してきた具體的な話を中心にいたします。まずアメリカの農業を地帯的に區別して説明しますと、アメリカの農業はだいたい六つの地帯に區分されます。第一の地帯は Pacific Coast region で太平洋沿岸のワシントン、オレゴン、カリフォルニアの各州が之に入ります。第二は山岳地帯で、テキサスの北、ニューメキシコ、コロラド、ユタなどの地帯、第三は山岳地帯に多少ダブル地帯で、テキサスからミネソタにかけての小麥地帯、第四はミシシッピ河の上流地帯でヴァイスコンシン、アイオワ、ミネソタの

一部、イリノイ等のコーンベルト (Corn Belt) 第五はテキサスから東方へ圓弧を畫してコトン・タバコ・ベルト (Cotton and Tobacco Belt) 第六はグイスマン東部へかけての酪農地帯であります。

私はカナダの西側からアメリカに入つて、大平洋岸を通り、山岳地帯、小麦地帯、コーンベルトを通り、ワシントンに参りました。この大平洋岸の地帯は非常にバラエテイの富んだところで、氣候は暖いが雨量は比較的少く、南部は年八インチ程度で雨量の非常に少ないところです。この地方ではイリゲーションの効果が非常によく分ります。それが無いところは小麦が非常に粗放的につくられており、イリゲーションのあるところでは、エーカー當り年收一〇〇ドル以上という野菜果樹地帯があります。イリゲーションはこの山岳地帯でもところどころ見られます。ニューメキシコやコロラドではイリゲーションをすれば集約的野菜畑となり、そうでなければ非常に粗放的な牧場です。この地方では普通一萬乃至二萬エーカーの野草牧場に肉牛が二、三百から四、五百頭いるという調子です。私はニューメキシコでカウボーイと友だちになりましたが、二萬エーカーの牧場に四〇〇頭の肉牛を飼つており、努力はおやちとカウボーイの二人でした。乳牛ならば搾乳機をつかつて五〇頭を一人で世話できるのが標準だそうです。この邊の肉牛の飼いは極めて單純で、砂漠地帯で雑草がぼつぼつ生えているところでそれを食わせるだけです。カウボーイの仕事としては去勢、除角が主です。冬も放牧しますので、雪が深くなつて牛が草を食えなくなつたときには飛行士をたのんで、飼料を落してもらえばいいのです。このような非常に粗放的な牧場經營がこの地帯の特徴です。

つぎのテキサスからミネソタにかけての小麦地帯は、ドライランド dry land が主體です。イリゲーションをやつて小麦をつくつてゐる例はないといつてもいい程度です。この地帯の農業はミネソタは別ですが概して北ほど粗放のようです。北部の地帯では二年小麦一年休閑の形から一年小麦一年休閑という方法がまだ相當行われています。し

かし南部のテキサス、カンサスでは多少小麦經營が集約的となり、ある場合には甜菜牧草小麦の三年輪作が入りこんでいます。しかしこの場合でも小麦に肥料をやることはあまりないようです。輪作の際、甜菜にやつて小麦にはやらないのが普通ようです。小麦地帯、特に小麦單作の經營は比較的大きく五〇〇エーカー乃至一〇〇〇エーカー程度の經營が別に大きいとは考えられません。これらの家族勞力經營も親父と息子の二人でやつている場合が多いのです。小麦、甜菜、アルファルファの輪作になると多少様子がちがつてきます。キャナダのサスカチワン(Saskatchewan)でみせてもらった經營では、三〇〇〇エーカーの小麥農場で勞力は二人で、コンバインとトラクターでやつていました。一般に小麦單作或いは小麦を主體にした經營は粗放的であります。

第四のコーン・ベルトになりますと様相はだいぶ變ります。私は農業についてアメリカのビッグ・ツリー・ステーツ(big two States)はテキサスとカリフォルニアだと思いますが、このコーンベルトの農業も非常に面白い。というのは、アメリカのファミリーサイズの農業の典型がここでみられるからです。去年「ミネソタの娘」という映画が参つたことがあります、これに注意してみますとあの邊のファミリーサイズ・ファーマー(family size farmer)がこの中でできます。面積は二〇〇から四〇〇エーカーで、三分の一コーンをつくり、三分の一が牧草栽培が野草のパスチャアで、残り三分一がオートというのが一番多いようです。勿論オートの代りに一部分大豆を植えてあるところもあります。牛は三〇から五〇頭居り、勞力は親父と息子の二人です。息子が大學に行つていたりして家にいないと常備を一人傭う程度です。その外農繁期にも他人の手を借りることは稀です。

酪農地帯は大體コーン・ベルトと同じといつてよいでしょう。ただ東部に行くにつれて經營は小さくなります。

最後にコトン、タバコ地帯です。この地帯はまた非常に様子が變ります。ここにも立派な家族經營はありますが、大

きなプランテーションとその傍にある貧小農のいちじるしい対照が先ず目につきます。南部では御存知の通り、南北戦争後八〇年経つていますが、當時のプランテーション (Plantation) がまた残つています。ミシシッピ州の或るところでは三、〇〇〇エーカーの棉のプランテーションを見ました。またテキサスでは五〇家族ぐらゐの黒人を養つてゐる大きなプランテーションをみました。この経営も三、〇〇〇エーカーの農場でその半分ぐらゐに棉をつくつており、棉花を摘む忙がしいときには常傭のほか二〇〇人から三〇〇人の日傭を入れてゐます。農場の起源をききましたら二〇〇年ぐらゐ前と云ふことでした。プランテーションの主人は非常に立派な家に住んでゐました。その家は南北戦争のとき一部分こわされたが焼けなかつたといふことでした。その傍らに、我々の生活よりは良いが、むこうのプランテーションの主人に較べればひどく悪い家にニグロの五〇家族ぐらゐが住んでゐます。その中には南北戦争以前の奴隷の家もあるといふことでした。最近の建築のものでも非常に小さく、やつと二間ぐらゐです。おそらく内も非常にきたなく、家財道具もほとんどないのであらうと思つて興味をもつて見せてもらうと、そうでない。内には電気冷蔵庫があり、自動洗濯機があります。自動車もポロだけとあります。あれが俺の自動車だといふのをみると、日本のタクシーより良い。大内さんがスイスの統計會議に行かれたときアメリカに一寸立寄つた感想として、アメリカにはプロレタリアがいけないといふことをいわれているようですが、貧乏人という意味ならば農村にもプロレタリアはいないのです。ついでに申し上げますと、ニューヨークで貧民窟をみましたが、これが貧民窟かと思われるほどでした。

それから私はシエア・クロツパー、日本でいえば刈分小作人を尋ねまして、遂に一〇エーカーといふのをみつけました。向うの連中の話しによりますと、五エーカーといふのがあるようですが、五エーカーのは私にはつかまへられ

ませんでした。しがし私のみた一〇エーカーのものでシエア・クロツパーの制度が残つておつて、主人から農機具を借り、生産物の半分は主人にやるという制度です。このようなシエア・クロツパーの問題はアメリカのインテリにとつて一つの大きな問題となつていますが、差當りは、彼等が例外なくといつてよいくらい棉をつくり棉の値段が非常にいいから経済的にそれほど悪い生活を送つていません。非常に零細な經營といつても、我が國の平均一町歩に比較して、私のみたいちばん小さいのが一〇エーカーでしたから、小作料の負擔もそれほど大きくは感ぜられないのです。南部の旅行で私はエクステンション・サービスの方の案内をうけましたが、エクステンション・サービスが案外貧農の技術指導に熱意を示さないという非難がありました。それにはこういう事情があります。アメリカにある三つの農業團體 A F B F (American Farmers Bureau Federation), A N F がそれぞれ末端まで組織をもつていますが、そのうちでいばん大きな A F B F は一三五萬の會員を擁しておるといわれていて、この非常に大きな力をもつファーム・ビュローがエクステンション・サービスと抱き合つてゐるのです。普及員がファーム・ビュローの集會で技術指導の演説することがきまりです。もちろんこの會合は公開で、會員外でも自由に出席することができるので、ファーム・ビュローと普及員との結びつきは否定できません。それで兩者の關係を絶つてという法律も毎年のように議會にでるわけですが、いつもにぎりつぶされます。だいたいファーム・ビュローはどちらかという富農に重點がおかれ、政黨の色彩は表面的にはありませんが相當共和黨的に見られています。従つてこれと手を結ぶエクステンション・サービスも富農の技術指導にいちじるしく傾くという非難があるのです。アメリカのデモクラシー意識を以てしてはシエア・クロツプの問題は我慢できるものでないことは、ニグロに對する差別待遇がアメリカのインテリにとつて我慢できないのと同様の問題であると思われまゝなのに、我慢できないという意識がエクステ

ンション・サービスの連中にはどうも少いように私には見受けられました。従つてシエア・クロツパーの生活程度などを知る材料をエクステンション・サービスは全然持つてはおりません。シエア・クロツパーは決して黒人ばかりでなく白人にもありますが、やはり主として黒人の問題といえます。これに關連して南部の黒人について少しお話ししましょう。

カナダからの一行と別れてからニューヨークとワシントンに少し滞在し、それから南部へ行つたときのことです。餘談ですが私は旅費を節約する意味で、行程の全部をバスで旅行しました。アメリカの旅行でいちばん高い旅行は寢臺車を使つて汽車旅行をする方法で、そのつぎが飛行機です。そのつぎが普通の汽車で、汽車と飛行機とがほとんど變りありません。戦争がすんで拂下げの飛行機を使つた會社が簇出し、一臺しかない飛行機會社もたくさんできました。それが競争で値段を引きさげているのです。いちばん安いのはバスです。日本のバスよりはるかに大型で四十五六人のれます。グレイハウンド・バスという大きなコーポレーションが全國的にバス網を張つています。座席は樂で六十度位に傾斜させることもでき、電燈も自分の席だけ明るくて他に迷惑を及ぼさないようにできています。私はバス會社にすい分コントリビュートしたことになります。この旅行で先ずテネシイ州のノックスビル——これはTVAの本部のあるところ——でバスを降りると、待合室が二つになつています。そして一つには「ホワイト」(White)他方には「カラード」(colored)と書いてあるのです。なにげなしに部屋をのぞきますと、ホワイトの方は壁が白く塗つてあり、カラードの方は茶つばい色に塗つてあります。そこで「これは壁の色かな」と最初考えたのですが、カラードというのにニグロが入るのです。私はホワイトに入りましたが、心臓が弱かつたらカラードの方に入つたかもしれません。こういう形の黒人に對する差別待遇はあまり愉快ではありませんでした。バスに乗つても後ろ半分が

グロの席で、前半分が白人席です。この程度ならいいのですが、レストランが別、學校もニグロのは別です。南部地帯では州の法律で白人と黒人との間の結婚を禁止しております。もし法外結婚をして子供ができると、子供はニグロになります。さらに驚くことは、教會がちがう、ニグロは別に教會を持っています。私はアメリカを旅行するときに行けるだけフアーミーの生活にじかに觸れたいと思ひ、南部でも四、五軒のフアーミーの家にとまりましたが、そのうち二回まで日曜日につくわしました。そして教會にでかけないかというので、お供しましょうといつて教會に参りますと、ホワイトとカロードと教會が別です。私は黒人に對する差別待遇が南部における保守的な傾向と相當深く關係している、と考えます。トルーマン大統領はこの差別待遇をこわそうとしていろいろ苦心していますが、なかなかこわれないのです。

アメリカ農業の規模

アメリカの農業地帯の話についてはだいたい以上の如くですが、そのつぎにアメリカ農業の規模についてお話ししたいと思います。アメリカの國土面積は大體三〇〇萬平方マイルすなわち二〇億エーカーあり、そのうち農地が四億エーカー、放牧地が七億エーカー、森林六億エーカーです。森林の半分ほどは牛の放牧に利用されているといわれます。日本に於いては牛を林地に放しますと木の芽を食うといつて國有林でさえなかなか許可しないようですが、むこうでは個人の林地でもたいがい無料で許しています。南部のアルカンサスで訪ねたある農家は、二〇エーカーの牧場に五〇から六〇頭の牛を飼っているのです。それでは牛が飼えないだろうとたずねると、あそこの（他人の）林地で飼えるからいいとの話しでした。これだけの土地に對して農場の數は六〇〇萬足らずです。一つの農場の面積は平

均一九五エーカーとなり、約一〇〇町歩ということになるわけです。その半分以上はバスチャーです。平均一町歩足らずの日本とはだいぶちがうわけです。地方的には北西部のこの山岳地帯小麦地帯には二萬ないし一〇萬エーカーに達するような農場や牧場があり、この地帯（南部及び東北部）の海岸地帯には非常に小さいものが集中しています。むこうでは日本の場合のような大農、中農、小農、貧農という、そういうような農家の範疇に對する精密な調査などないようです。A F B F の資料によりますと、アメリカの農家の範疇は三つあります。その第一はラージ・スケール・ファーム (large scale farm) の、第二がファミリー・ファーム (commercial family farm) 第三はスモール・ファーム (small farm) です。この基準は面積によらず農産物價額によつています。ラージスケール・ファームは二萬ドル以上で十萬戸、ファミリー・ファームが一千二百から二萬ドルで三百五十萬戸、一千二百ドル未満がスモール・ファームでこれが二百七十萬戸といわれています。これは多少古い數字で、現在の農産物の價格からいえば標準が少し低すぎる感じがしますが、大、中、小農の數を知る目安にはなるでしょう。中農のネット・インカムでいうと、私の見た限りでは月二〇〇ないし四〇〇ドルぐらいです。その大きさはだいたいさきに申しました二〇〇から四〇〇エーカーで、家畜が三〇から五〇頭、勞力は親父と息子の二人というような經營です。この場合息子がなければ常備を入れなければならないので、それだけ純収入は少くなります。

機械化農業

つぎにアメリカ農業の機械化の問題に入りたいと思います。カナダからアメリカに亘る最初の三週間の旅行では、晝間農場や大學、試験場などをみて夜は汽車で走るといふ無理な旅行でしたので、カナダ五州、アメリカ十二州を大

觀したことになりますが、この旅行中、馬や騾馬 (mule) を使つて農場で農作業をやつてゐるところは一回もみませんでした。或は私たちを案内してくれた農場が優秀なものばかりであつたのかもしれないが、アメリカの機械化がどの程度すすんでゐるかを知らぬ一つの例になると思ひます。その後テキサスに行く途中のテネシーで五〇エーカーぐらいの小さい農家で、二頭立ての栗色の馬を使用してゐるのをみました。これが馬を使つてゐるのをみた最初です。もちろんアメリカ全體では一九四七―四八年に於いて馬及び騾馬が九百萬頭居ります。したがつて、テネシーのみならずミネソタ、ヴィスコンシンでも二頭立ての馬をコーンの刈取りに使用してゐる光景をときたまみましたが、それはたいへい型が決まつており、五〇エーカー前後の小さい農場であるか、傾斜地であるか、オヤジが年寄りで、「俺の生きてゐるうちは馬を使うのだ」というたぐいです。一人前の農家では使つてゐないといえます。非常に面白いことは、トラクターをいつごろから使つてゐるかとききますと、二、三千エーカーという大農場では一九一〇年から二〇年と非常に古いことをいいますが、二〇〇エーカーから四〇〇エーカーのファミリー・サイズの農場では三八年、四二年、四五年と、いう答えをするのが普通です。最近一〇年間に使用を始めたのが多いのです。統計からみても極めて明瞭です。トラクターでは一九二〇年には二四萬六千臺、一九四一年は一六七萬臺、一九四八が三一五萬臺となつており、一九四一年から一九四八年にかけてトラクターはほとんど二倍になつてゐます。他の大機具についても同様であるといえます。農場のトラツクは一九四一年が一〇九萬臺、一九四八年が一九二萬臺となつてゐます。コンバインも同様です。コンバインは値段が七、〇〇〇ドルぐらゐする高い機械ですが、これが一九四一年には二二萬五千臺、一九四八年には五二萬臺になつてゐます。これは一九二〇年にはわずかに四千臺ぐらゐしかありませんでした。それが現在五二萬臺にふえています。この傾向はコーン・ピツカーや搾乳機も同様です。トラクターについてい

えば、二〇〇から四〇〇エーカーのファミリー・サイズの農家に大體行きわたつたのが戦争開始後だということが數字にもはつきり出てゐるわけです。

カナダからアメリカへの旅行の時期は丁度春麥の中耕、砂糖大根の中耕、DDTの撒布、テキサスでは冬小麥の刈取等農作業が相當忙しい時期でしたが、馬や騾馬を農場で見なかつたことは私にとつて印象的でした。日本では農業の動力源として家畜の導入が問題になつていますが、そういうことはアメリカではもう問題になりません。一人前の農家ならもはや馬や騾馬に頼らぬようになってゐるのです。數字を對照すると面白いのですが、皆さんすでにお氣付きの通り、牛馬を合わせて日本では二戸に一頭弱居ります。アメリカでは六〇〇萬弱の農場に三一五萬のトラクターがあり、大體二戸當り一臺強です。日本にある牛馬の合計より、アメリカのトラクターの數の方が多いのです。日本で牛馬を持つてない農家がどういふものであるかということから、向うのトラクターを持つていない農家がどういふものであるかだいたい御想像がつくことと思ひます。アメリカではトラクターが増加するにつれて、馬と騾馬が非常に減少しました。一九三〇年に一、九〇〇萬頭ぐらゐの馬と騾馬が居りましたが、一九四〇年には一、四五〇萬頭となり、一九四八年には九〇〇萬頭ぐらゐに減つております。馬の値段もだんだん下落し、今は五〇ドルだせば相當の馬が買えます。ところが日本では釧路の産地で五、六萬圓ぐらゐでしょうか。ドルで計算しますと一五〇ドルから一七〇ドルになります。ところが向うではいいものが五〇ないし六〇ドルです。餘談ですが、アメリカの連中が日本との貿易でなにがいちばんもうかるかときいたので、私は一つは馬で、もう一つは自動車だろうと答へたことがあります。一九三八年型の自動車は日本で四〇萬圓ぐらゐしますからドルで一、一〇〇ドルぐらゐになります。ところが向うでは一五〇ドルから二〇〇ドルです。中古の車ニューズド・カー (used car) のマーケットはどこにもありますが、だい

たい日本のタキシード程度ならば一五〇ドルから二〇〇ドルぐらいで買えます。向うではガソリンも安い。ガロン二二セントから三〇セント位で、一ガロンあれば軽い車で一八マイル、重いものなら一五マイル走ります。

アメリカの機械化の問題に關連して、アメリカを旅行して感じたことですが、いたるところで道路の新築、修理をしています。特にTVAの中心テネシーでは四方八方の道路工事が行われていました。このように土木工事が發達していることが、農業に對しても機械の發達を促していると思います。もしアメリカで土木事業が發達しなければ、農業の機械化もそれほどすまなかつたのではないかと考えられます。

ところが日本では農業の機械がほとんどありませんから、土木機械が孤立しています。これはアメリカと非常にちがう點です。またむこうではイリゲーションのためにキャナルを掘る機械が非常に發達しています。カリフォルニアにはすでに五百萬エーカーの灌漑農業があるといわれていますが、更にこれを擴張する大きな計畫が今實行されています。キャリフォルニア州は大きつばにいつて日本と同じくらいの面積があります。サンフランシスコから少し南のところ南北キャリフォルニアを分ける線があるのですが、農地は三分の二が南部にあり雨量は逆に北部が二倍あるといえます。そのため北部に大きなダムをつくり、運河で水を南部にひくとともに南部にもダムを造つて南部の水もできるだけ利用しようというので、TVAと多少構造はちがいますが、政府がセントラル・ヴァレイ・プロジェクト (Central Valley Project) として二〇億ドルの豫算をつかつて工事をやつています。フレズノという町の近くのフライアント・ダムと、そこから出る運河を見たのですが、運河は上面幅八〇呎、深さ二〇呎底幅三六呎で、それを掘つている先頭まで追つかけていつてみました。工事は一ばん先がブルトーザーで、その後を掘穿機がキャナルの形に素掘りしていく、そのあとをその形にセメントを三インチ半の厚さに流してゆく機械がゆく、その後を色を白く塗

つたり乾かしたりする機械がゆきます。この四組の機械の通つた跡には上幅八〇呎、深さ二〇呎、底幅三六呎のキャナルができてゆくのです。進みかたは目に見える程度で、八時間に一、四〇〇から一、五〇〇呎はすすみます。戦争がはじまつてから農業の機械化が非常にすすんだことは前に申し上げました。それにはいろいろの理由があります。戦争がひどくなつて人手が不足したことも大きな理由として考えられますが、もう一つは農家のふところが非常によくなつたことが考えられます。さきほど申し上げましたように、農家——これは私が現實に見た十軒ほどの家族経営ですが——のネット・インカムが一カ月二〇〇ないし三五〇ドルで、これはなかなかいい収入です。向うの役人の収入が平均三〇〇ドル程度です。アメリカではいろいろな機會に日本の問題を話したのですが、日本では役人の俸給が平均一七・八ドルだという話をしました。するとそれは *one week* か *two weeks*、*one week* じゃあな、*one month* だという、口の悪いのが一體何を食べてるのかとききました。向うでは労働省で都市の中産階級の家計調査をやつていますが、その結果は各都市に於ける夫婦と子供二人の四人の一カ月の家計費の平均が月三〇〇ドルになっています。我々の一五倍です。従つて中農の純収入が一カ月二〇〇から三五〇ドルというのはなかなかいいのです。いろいろ向うの統計をしらべますと、一九三八年ではグロス・インカムですが年九八一ドルという平均がでています。一九四二年には平均二、九九三ドル、一九四七年は五、八一三ドルとなつています。一九四八年は多少良くなり、一九四九年は多少下つているかもしれませんが、一九三八年の約一、〇〇〇ドルにくらべて非常に増加しているわけです。そしてそれがアメリカに於いて農機具を非常に入れる理由になつたと思ひます。アメリカの農家は一九二九年を中心にして農業恐慌により、非常にまいつてしまい、その頃は一ドルの金も大變であつたといわれていますが、こんどの旅行で気がついたのは農家のふところがいかにも良くなつたということでした。新築した農家がなかなか多い。しかも古い

家より數等良いのをつくつています。日本でヤミをして疊替えをした程度の金のもうけかたの比ではありません。家を新築したのみでなく、農機具を買つています。一九四二年ごろ買ったトラクターがまだそんなに古くないのに、今年また新しく買ったというおやぢさんときどき合いました。アルカンサスで水田を三〇〇エーカー作つている農家では、働き手は親父とハイスクールに行つている息子の二人ですが、トラクターを三臺持つています。そのうち二臺は古いから最近新型のを買ったというのでした。それだけアメリカの農民には餘裕があるわけです。

一體トラクターとコンバインがアメリカの農業をどうかえたかといえますと、先ずこの機械化がアメリカのファミリーサイズの農場の地位を強くしたことです。大農と小農の優劣論といつても、日本の平均一町歩の場合と向うはだいぶちがいますが、二〇〇ないし四〇〇エーカーの農場がトラクターとコンバインによつて非常に強化されたのは事實です。この連中にトラクターとコンバインが入ることによつて、彼等が三、〇〇〇エーカーのものたちうちができるようになつたわけで、非常に面白いことと思ひます。もちろん機械化によつて家族經營がみな強化されたというのではありません。ファミリーサイズの農場といつてもピンからキリまであるので、テネシーの南部には五〇エーカーぐらゐのがざらにあります。アメリカの農務省の紹介で私はいちばん小さいのを見たいと思ひまして、NRSにいたレイモンド・デーヴィス氏にききますと、日本の小農をみると大分ちがうと注意されました。それでも紹介してもらつたのですが、テネシーのノツクスビルのあるノツクス・カウンティでは平均四五・八エーカーで牛が一户當り六頭というのです。これがテネシーではいちばん貧しいものでした。南部にはそれよりもさらに小さい一〇ないし二〇エーカーで棉だけつくつている農家がありました。それはミルクまで買うのですが、これらは棉の値段が下ると影響が大きいといつています。これらの農場は機械化によりファミリー・サイズがより強化された恩恵にはあらずかり

ません。しかしミネソタやヴィイスコンシンのファミリー・サイズの中堅はトラクターコンバイン等の機械によつて強化された部類です。御承知の小農保護政策では、家族経営の農家に農機具代金を政府が五分の利子で五年まで貸すことになつています。ニューデールの思想ではファミリー・サイズ・ファーマーの地位を強化しようということが顯著ですが、この特別の金融制度もその一つです。日本では農業関係の出先機関の廢止がしきりにいわれていますがアメリカではこれと逆です。その一つが Farmers Home Administration で、二三郡に一つのフェデラル・ガヴァメントの事務所があり、家族経営のためこれが農場購入資金や農機具購入資金を貸しているのです。そして注意すべきことは、金を貸すばかりでなく簿記をつけさせ、経営の指導をし、農民の生活を高めようと考えています。日本の農林省でも役人に二つのタイプがあり、食糧管理に従事しているものはマーケットとかブライスの問題に主として關心を持ち、農政局關係の者は農民の生活に主として關心を持っています。アメリカの農務省にもやはりこの二つの流れがあつて、いわゆる農政的に物を考ようとする人々がこの金融關係に集つて居るのです。この金融制度によつて家族経営農家が非常に強化されたことも事實です。機械化の第二の影響としてはアメリカの農産物が非常に増産されたことです。ことに人間がたべるものは戦前にくらべて三分の一前後増加したといわれています。これは單位當り收量の増加があつたと同時に、いまままで馬が食つていたものをつくつていた畑が、普通の作物畑に轉換されたことが非常に大きな理由になつています。どの程度に轉換されたかの推定がありますが、非常に大きなものです。機械化による轉換は五、五〇〇萬エーカーないし六、〇〇〇萬エーカーということです。これは日本の全農地の五、六倍の廣さです。それともう一つは、アメリカが農業の機械化によつて單位當り農産物收量が非常に増産されたことも事實です。單位當り農産物の收量が増加したのは小麦、トウモロコシ、棉花、砂糖大根等何れも同様です。日本では昭和七、八年よ

り農産物の増産は停滞していますが、向うでは飛躍的な生産力の増加を示しています。小麦について一九三〇年を中心とした三カ年間のエーカー当り収量は一四・八ブツシエルでしたが、一九四〇年を中心とした三カ年の平均収量は一五・四ブツシエルとなり、一九四六年を中心とした三カ年のエーカー当り平均収量は一七・五ブツシエルになつています。二割に近い増収です。トウモロコシはハイブリッド・コーンの普及によつて一九二九——一九三一年のエーカー当り収量二三・四ブツシエルに比し、一九三九——一九四一年の三カ年平均は三一・七ブツシエルとなつています。トウモロコシの作付面積は全農地の二五ないし三〇%にあたりますから、トウモロコシの増産が農産物全體の増産に随分影響しているわけです。

最近のアメリカ農業の進歩は機械化のみならずエクステンション・サービス、ソイル・コンサーベーション・サービス (Soil Conservation Service) 等によつて、個々の農家にまでエージェントが入りこんだことも與つて力があります。イリゲーションや品種改良の普及の問題も亦關係しています。肥料の使用はこの一〇年間二倍になつています。平均使用量が一〇年間に二倍になつたのですから、フアミリー・サイズの農家でいいものは三、四倍の肥料を使用するに至つたと考えられます。米作に硫酸、燐酸、加里をやつていますが、ある米作農場ではエーカー當り六〇〇ポンドの硫酸をやつているとききました。そんなにたくさんやるのは一軒だけでしたが反當五貫としてもエーカー當り大題二〇〇ポンドですから、六〇〇ポンドといへば一五貫位やつてゐるわけです。この農場はこれだけの肥料を飛行機でまくのです。

機械化だけをとりあげてそれがどの程度單位當りの増収になつたかという問題はむずかしいことですが、短期間に作業の集中するものにとつては機械化によつて適期作業を遂行できることと深耕とが反收増加をもたらしたものと考

えます。日本の機械化も適期作業の完遂という面で反當收量にもプラスになることが私には考えられます。

カナダでもアメリカでもそうですが機械化によつて農業が集約化されつつあります。カリフォルニアやカナダの野菜や砂糖大根は、イリゲーションによつて集約化しました。日本で堺市の一部に極端に集約な野菜畑があつて、一戸當り一反か二反の蔬菜畑に天秤棒で水をかついでいつて、ヒシヤクでかけるのがあります。こういうものに較べればなんといつても粗放になるかもしれません。日本でも畑作灌漑が完備すれば、機械を入れることによつて全體として集約化がすすむことも考えられます。勿論トラクターの規模、構造は向うのように大きなものはとり入れることはできないと思いますが、方法によつては機械化即粗放化とはならないと思います。

機械化の効果のいちばん大きいのは人間勞力の節約で、この効果はテキメンです。たとえば向うの調査數字によりますと、一〇〇ブツシエル當りの小麥を生産するのに必要な勞力は一九〇〇年には一〇八時間かかつたものが、一九二〇年には八七時間となり、一九四〇年には四七時間になりました。その後の調査はありませんが、四七時間よりもつとさがつてゐるはずで、日本では小麥の反當栽培勞力は二〇ないし二五日ぐらゐに計算されてゐると思ひますが、その計算によれば小麥作の單位當り勞力はアメリカが日本の五〇分の一乃至一〇〇分の一となります。稲作については更に明瞭な差があらわれます。

アメリカの稲作

私はアメリカの稲作に非常に注意しまして、五つの經營をみました。アメリカの稲作は日本の稲作とちがひ一農場當りの經營が非常に大きい。これはトラクターやコンバインをつかつたりするから當然のことです。稲作經營の最小

單位はアルカンソー、ルイジアナで一〇〇エーカーといわれました。これは考へ得る最少の單位で、實際に一〇〇エーカーの經營にぶつかつた經驗はありませんでした。普通考へられる經濟的にミニマムな經營單位は二〇〇エーカーで、この程度の經營にかなりぶつかりました。二〇〇エーカーといつても稲、アルフアルファ、燕麥との三年輪作によりますと六〇〇エーカーの農場がなければなりません。一年稲をつくれれば、翌々年でなければ稲をつくらない形です。灌漑について見ますと、ミシシッピ河やリオグランデの近くでは河からイリゲーションをしているところが多く、河から遠ざかるにつれて自分で井戸を掘つて稲作をやる場所が多いのです。井戸は日本のように浅くなく、私が見た水田用の井戸でいちばん浅いものでも四〇〇呎、深いものでは一、八〇〇呎ぐらいがあります。一つの井戸で三〇〇から四〇〇エーカーの灌漑をやっています。水が豊なのです。私は冷水田の心配はないかととききますと、深から水温は非常に高い故冷水田の問題は全然ないということでした。

アメリカの稲作の全體をながめますと、カリフォルニア、テキサス、ルイジアナ、アルカンサスの四州に集中して外では問題になりません。面積はだいたい日本の五分の一ぐらいではないかと思ひます。アメリカ人は米は殆んど食べません。御飯はダンゴのようにしてしまい、不味いです。ときどきレストランにライスがあることがあります。普通はヴェジタブルのなかにはいつています。それで米を食べる場合も極く少量です。向うの日本人は一日一回は米をたべましようか。その連中が食う以外にはアメリカ人はたいしてたべません。水田というところカリフォルニアが問題になります。全體の七分の一程度で、七分の六はテキサス、ルイジアナ、アルカンサスの三州に集中しています。北部には全然ありません。私が最初アルカンサスでエクステンション・サーピスの人に案内されて水田を見、農家にとまつて、エクステンション・サーピスの人から水田の統計をみせてもらいましたが、收量が非常に高いのです。反

當收量に引きなおしますと、アルカンサス全體で二石二斗を超えるのです。あとでこれは粳つきの收量だときいて安心しましたが、玄米にしますとずつと落ちます。しかしカリフォルニアの收量は粳つきで一九四七年にエーカー當り七六ブツシェルとアメリカの農務省の統計にでています、これはその年の日本の稻の收量エーカー當り七〇・八ブツシェルと比較して、カリフォルニアの方が割近く高いのです。玄米に換算しても反當收量三石に近い農場に出遇いました。これは日本の稻作にとつて大きな問題で、日本の稻作は勞力は澤山かかるが反當收量はイタリヤやスペインは別として非常に高いというのが一般的でした。ところがカリフォルニアがそれをリードしているのです。しかもアメリカでもカリフォルニアの稻作がいちばん機械化されているのです。種子は飛行機でまくのが特徴です。これは全部ではありませんが大部分が飛行機で播種されています。私は時候がちがうのでこれをみませんが、テキサスでは飛行機で肥料を撒布しているのを何回もみました。DDTも飛行機でよく撒くようになりました。テキサスでよくグスター (Guster) という看板をみました。これは種まきやDDTの撒布を一時間何ドルという値段で請負うのです。これは戦後の新商賣で、復員の航空兵が飛行機を一臺か二臺ぐらゐもつてやつています。

アメリカの稻作様式は前年にブラウ、ハローで耕起し四、五月にディスク・ハローで代掻きをします。これはトラクターが引つばつてやります。農場は普通二〇〇ないし一、〇〇〇エーカーです。代掻後に播種をしますが、そのとき水をためるための畦をつくります。畦のつくりかたは大へん特徴的で、日本では一枚の面積が五、六畝で、耕作權、所有權別に畦がありますが、向うでは二〇〇ないし一、〇〇〇エーカーという農場ですから、そういう不自然な畦の構造はいりません。その代り耕地に高低がありますので、水をもたせるために畦をつくります。まず測量機によつて二、三人がかりで二インチごとの等高線にしたがつて印をつけます。そしてその跡をトラクターで二呎位の畦を

作つてゆくのです。地形が複雑ですと、まるでへびがのたくつていような畦ができます。しかしそれがあるべきところにあるので、決して無駄にあるものではありません。地上からみるとその有様はなかなかわかりません。テキサス州の西原サイラという農場で、ここには飛行機を二臺持っています。アメリカでは二人乗りのが一臺二、〇〇〇ないし五、〇〇〇ドルで、大體自動車と同じ値段で買えるのです。五、六エーカーの土地があればとび出せますので飛行機をもつ人もだんだん増えていきます。それは日本で自動車を持つよりもつと簡単なのです。この西原農場の飛行機で、テキサス州のヒューストン附近の農場をみましたが、水田を見ると等高線なりにきれいに畦ができていて無駄な畦は一つもありませんでした。南部諸州では大體一日一〇エーカーから四〇エーカー位のスピードで、トラクターで播種しますが、キャリフォルニヤでは畦をつくつてから飛行機で種子をまくのです。その場合農場には旗をもつた人が二、三人立ちます。そして飛行機に乗つた人がこつちの旗のところを歩いて種子を落し、向うの旗のところを瓣をとじる。高さは極く低いのですが蒔き幅は七・五尺ぐらいです。そして播種は同じ場所に三回ダブルように二五尺づつづラして播きます。場所によつて播種に過不足のないようにするためです。五〇〇ないし一、〇〇〇エーカーの農場ですと、五、六人で一日あれば播種できます。播種後の稲にイモチや蟲が発生することは非常に少ないといわれます。これは稲作の年齢が若いせいだと思ひますが、もし発生すればDDTや藥劑を散布します。飛行機でやると一日一、〇〇〇エーカーぐらい撤けます。灌漑は多くの場合は井戸を掘つてやりますので、日本のように水にまつわるいやな慣行などありません。あとはコンバインで刈ることになります。能率は土の状態によつて違ひますが、一日一〇エーカーから四〇エーカー位の刈取りができます。刈取つた米は大體籾付きのまま rice mill に持つてゆき、商人に賣るのですが、キャリフォルニアの國府田農場コウフダなどはいまは一、五〇〇エーカーぐらいになっていますが、しかし精米

貯蔵の施設は一萬エーカー分の能力があります。

價格について言いますと、極めて不思議なことには、こういう形でつくられたアメリカの米が、かえつて日本よりは高いということです。日本の米の方が安いのです。ですから彼等は日本の米がアメリカに輸入されることを非常にこわがっています。國府田農場では糯米をつくっていますが、今年日本から糯米が輸出されました。アメリカではカリフォルニア産の糯米で間に合うのに日本から安い糯米が入つたので驚いたさうです。國府田氏は六十をすぎた福島縣の人です。戦時中は強制キャンプに入れられ、カリフォルニア土地法によつて土地を奪われ、戦後ようやく恢復したところに日本から糯米がきて私の息の根がとめられるといつていました。單位當りの勞力が日本の一〇〇分の一ぐらいしかかからない稲作が、日本でつくられる米よりもつと高いというのはいろいろ問題を提供します。米麥の國際價格が日本よりまだ高いという理由で日本にはまだ農業恐慌がこないという見解もありますが、批評のかぎりではありません。

アメリカでは非常に大きな農業恐慌の問題が、深刻に議論されています。いまアメリカに農業恐慌が起つていっているのではありません。政府はそれを抑えるためにあらゆる努力をしています。プランナン・プランでは、これは結局取止になりましたが、一〇億ドルかけてもこれを防止しようというのです。アメリカの農民の政治的地位は日本より非常に強い、アメリカでは人數からいえば全人口の二〇%で日本の五〇%とは比較にならないほど少ないが、政府に對する農民の壓力は非常に強いものがあります。私たちが會議後に旅行團をつくつてアメリカの上院の農業委員會の人々に會つたとき、その人々は、「もしアメリカに農業恐慌が始まるなら、それはアメリカ全體の恐慌となるだろう、

農民が工業製品を買わなければ資本家も労働者も困るのである。それ故、我々が農産物の価格を維持しようというのは農民のためのみならずアメリカ經濟の繁榮をはかるために外ならない」というのです。日本では國內經濟に於ける農民の地位が低く、國內市場としての農民の地位はネグレクトされがちです。アメリカの農産物の値段は私の歸る九、一〇月ごろはやや恢復しましたが、しかしさきほど申しましたように、アメリカの農業生産力の増加は底を知らぬほどのものがあります。日本では一割増産が容易ではないのに、アメリカは五割増産もやろうと思えばできます。しかしいまは小麦、トウモロコシ、棉など主要農産物については作付制限を行い、また莫大な金をつかつて農産物價格の維持をやつています。

アメリカにとつては日本は極めて小さな市場であります、それでも國內の滞貨のはけ口として日本が相當問題になつてきています。この點から見ても、日本農業の立場は甚だ困難なものになつてきたわけです。